

硫黄島を訪ねて

防衛大臣政務官 衆議院議員 大前繁雄

今年の3月14日、日米戦没者合同慰霊顕彰式に出席するため、初めて硫黄島を訪問した。

前日、入間基地近くのホテルに宿泊。翌朝早く、C-1輸送機に乗り込んだが、搭乗者の多さに驚かされた。聞いてみると、最近硫黄島が映画や書物で脚光を浴びていて急激に関心が高まっているのに、島内には自衛隊の基地があるのみで、一般人の渡航は禁止されているため希望者が多く、C-1輸送機2機定員一杯の約100名が参加したとのことである。

島の美しさにおどろく

窮屈な輸送機での飛行を約2時間続けて、午前10時過ぎ、いよいよ硫黄島に到着。

飛行機を降り立って、まず驚かされたのは、島の美しさであった。初夏を思わせるさわやかな気候は南国だから当然としても、平らかで緑の多い島は、事前の私の予想と大きく異なるものであった。

クリントイーストウッド監督の映画『硫黄島からの手紙』を数ヶ月前に見た私は、硫黄島というのは、硫黄のかたまりのようなゴツゴツした島で、臭くて、とても人の住めるようなところではない、という先入観念を持っていたのである。

ところが実際に見る硫黄島は、緑と涼風に包まれた美しい島で、あたかも、何回か訪れたことのある沖縄や奄美の一離島にいるような気がした。それもその筈、硫黄島は緯度でいうと、沖縄と丁度同じとのこと。東京からの飛行時間も、沖縄と同じ約2時間であった。

硫黄島攻防戦

厳粛な慰霊・追悼行事のあと、自衛隊のマイクロバスで島巡りをさせて頂いた。

今なお砲弾あとの残る戦跡の中でも、最も目を引いたのはやはり、もぐら穴のように地下に掘りめぐらされた地下壕である。医療棟まで設けられたという壕内は、硫黄臭もきつく、気温も高い。こんな中で36日間もの長期に亘って戦い、ほぼ全員玉砕した日本軍兵士のことを想う時、さすがに涙を禁じ得なかつ

た。

硫黄島戦の最大の特徴は、兵員、物量で圧倒的に優る攻撃側の米軍の死傷者が、守る側の日本軍をはるかに上回った、という点である。

昭和20年2月16日、海から攻撃を開始した米軍約5万2千名。これに対して陸で守る日本軍は、陸・海軍合せて2万1千名余。一ヶ月以上の激戦を経て、日本兵はほぼ全員が戦死もしくは重傷を負って玉砕したが、米軍はそれを上回る2万8千名以上の死傷者を出したのである。

この戦史に残る日本軍の敢闘は、日本兵一人一人の勇猛さもさることながら、硫黄島守備隊の指揮をとった小笠原兵団長栗林中将の見事な戦術に負うところ大である。

栗林中将は、「海」対「陸」の戦いという米軍の想定を逆転させ、上陸した「地上」の米軍対「地下」に潜った日本軍の戦いに、転換させた。

硫黄島が米軍の手に落ちると、日本本土空襲が一気に容易になることを熟知していた栗林中将は、玉砕を覚悟の上で、一日でも長く持ちこたえ、一兵でも多く米兵に損害を与えるという作戦のもとに、全長18キロメートルにも及ぶ地下壕を構築し、長期持久戦を展開したのである。

無駄死ではなかった玉砕戦

結果的にはこの持久戦は、一ヶ月以上持ちこたえたとはいえ、日本軍のほぼ全員玉砕に終わり、硫黄島は米軍の手に落ちた。そのために戦後、「頑張ったといっても結局、島は陥落したのだから無駄な戦いだっただ、犬死であった」という批判がしばしばなされる。しかし、この批判は正鵠を射ていない。

この攻防戦の結果、多数の兵を失った米軍は、日本軍の抵抗の執念を改めて認識し、本土上陸戦を断念、戦争の早期終結へと方針を転ずるのである。日本が8月15日受諾したポツダム宣言はその表れであった。

よく先の大戦で日本は無条件降伏したといわれるが、それは誤りである。無条件降伏したのは軍隊だけであって（ポツダム宣言第13条）、日本政府との間では、健全な経済産業の維持（同第11条）、国民の自由意志に基づく政府の樹立による占領軍の撤収（同第12条）など、多くの条件が付された上での降伏だったのである。

そして、こういった条件付きの降伏であったことが、戦後、ドイツのように分割されることなく、単一の政府によって復興が進められる道につながったのである。

私達は、こんにちの我が国の繁栄、平和が、硫黄島をはじめとする英霊の皆さんの果敢な戦いと、その犠牲の上にあるということを忘れてはならない。

そのことに思いをいたすならば、未だ遅々として進まない遺骨収集事業など、

英霊に応える作業にもっと力を入れるべきであろう。そのことを改めて痛感させられたのが今回の初めての硫黄島訪問であった。

(本文は防衛医科大学校父母会・兵庫 鳩桜会 会報 桜鳩 2007 年 7 月 1 日 第 20 号に掲載されました。一部訂正されています。)